

冠動脈分岐部病変に対するステント留置術の 3D-OCT による検討

薬剤溶出性ステント(Drug-eluting stents: DES)の登場により経皮的冠動脈形成術(Percutaneous coronary intervention: PCI)は、長期の予後が向上してさらに確立された治療となり、実臨床では左主幹部病変を含む多枝病変に対しても行われています。しかし、分岐部病変に対する PCI 治療は、ステント血栓症や標的病変血行再建術の予測因子の一つとされています。また分岐部における不完全なステント圧着は、これらの有害事象を引き起こす可能性があるため、ステント留置後に側枝を拡張するためのガイドワイヤーをステント越しに通過させる部位がステントの圧着不全を低減させるために重要です。本研究で用いる光干渉断層撮影法(Optical Coherence Tomography : OCT)は、従来の血管内超音波法(IVUS)よりも高解像度を有するため、より詳細に血管内やステントの圧着の評価を行う事が可能です。また新たに開発された 3D 画像により、PCI 時に分岐部に留置したステント越しに側枝に向けて通過させたガイドワイヤーの位置の確認が可能です。この臨床研究では、冠動脈分岐部病変に対する PCI において、ステント留置後に側枝を拡張するに、ガイドワイヤー(GW)をステント越しに再通過させる場合の最適な部位を検討し、分岐部病変に対するステント治療の問題点を 2D/3D-OCT で明らかにすることを目的としています。

本試験は、国が定めた「臨床研究に関する倫理指針」を遵守し、当院での臨床研究倫理委員会(臨床研究の実施または継続について、倫理的観点及び科学的観点から調査及び審議する委員会)においてその科学性・倫理性について厳重に審査され、病院長の承認を受けて実施されます。